Gaz. **119**: 47–50. Tippo, O. 1941. A list of diagnostic characteristics for descriptions of dicotyledonous woods. Trans. Illinois Acad. Sci. **34**: 105–106. Venkateswarlu, J. & Prakasa Rao, P. S. 1970. The floral anatomy of Combretaceae. Proc. Indian Nat. Sci. Acad. **36B**: 1–20. —— 1971. Wood anatomy and systematic position of *Strephonema*. New Phytologist **70**: 767–771. —— (unpublished). Embryological studies in some Combretaceae. Wilson, T. K. & Shutts, C. F. 1957. A rapid wood maceration schedule using iron alum-hematoxylin. Stain Tech. **32**: 149.

* * * *

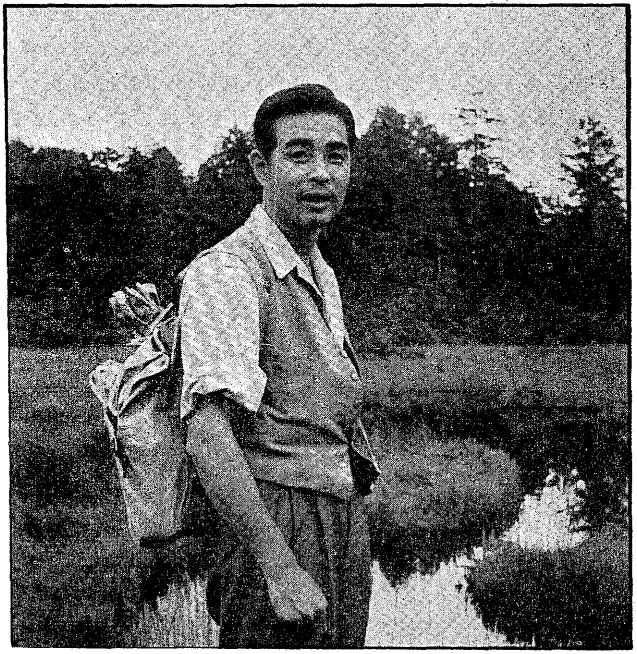
シクンシ科に属する15属39種の材の解剖学的特徴について調査し，そのいくつかは科全体に共通であるが，膜孔の分布，導管横断面直径，終端細胞膜の傾斜度，繊維細胞の存否とその長さ，および柔組織の状態と分布には相違が見られることを明らかにした。また，これらの木部の解剖学上の形態の相違に基づいて，科内の系統についても論じた。

□水島正美博士 (1925–1972) Dr. Masami MIZUSHIMA (1925–1972)

本誌の編集員 水島正美博士は去る9月9日癌のため亡くなられた。大正14年4月14日府中市の生れで享年47才。

氏は大学卒業の頃にはすでに日本特に北地の植物に精通し広い智識をもっており，その研究態度は終始一貫して誠に真面目なものであった。論文を書く時に少しでも疑問の点があれば外国から標本を借用してでもこれを自ら確認し，一篇の参考文献をも見逃さない慎重さであった。野外にもよくでかけその観察は精細であり，採集した標本には生育状態，草丈，葉の光沢，花の色香など生時の観察が丹念に書き加えられていて今後多くの研究者に役立つことであろう。ナデシコ科植物を専攻し，昭和36年東京大学から理学博士の学位をうけ，特にツメクサ属 (1960)，ハコベ属 (1965)，ワチガイソウ属 (1965) などについて詳しい研究を発表した。それらの論文の引用文献，記載，分布などの一行一行にその注意深さがよくうかがわれ氏の性格を物語っている。また各地の植物調査に参加し，伊豆大島 (1951)，尾瀬地方 (1954)，伊豆青ヶ島 (1955–7)，長野県下水内郡 (1956)，下北半島 (1956–8)，木曾御岳 (1958)，山形県朝日岳 (1964) などのフローラをまとめた。

氏の略歴を記すと，昭和19年9月北海道大学予科農類を修了後同10月一旦北海道大学農学部水産学科に入学したが，若い時から植物を愛好し宮部金吾先生にすすめられて昭和21年5月東京大学理学部植物学科に入学，昭和24年3月に卒業，更に同年4月大学院に進み，29年3月修了して同年4月から資源科学研究所の研究員になった。



尾瀬ヶ原中田代にて　昭和36年8月

牧野標本の整理を都立大学がとりあげ牧野標本館が新設されるに際し，氏はこの困難な仕事を担当する適任者として学界の推薦をうけ昭和33年3月都立大学に移り同35年4月同理学部助教授になって今日に至った。この間氏の努力により多くの研究者の協力をえてその標本の大半を整理して学界の期待に答えた。

一方氏は都立大学理学部で講義をすると共に，昭和31年から東京薬科大学，昭和38年から東京大学薬学部および教養学部の講師として熱心に学生の指導にあたった。また日本植物学会編集幹事，同編集委員，日本植物分類学会幹事をつとめ，昭和39年から植物研究雑誌編集員になった。その他氏の活動範囲はきわめて広く日本各地の植物愛好の人々を親切に指導し，外国にも最もよく知られている日本の植物分類学者の一人であった。昭和43年9月から5ヵ月間国立台湾大学に客員教授として招かれ，また昭和44年9月米国コルバリスで開かれた日米科学協力事業のシンポジアムに参加した。

二年半前不幸にして病魔に襲われてからも氏は学問に対する情熱をもち続け，氏の部屋には常に研究資料と各国から集めた最新の文献がうず高く積まれていた。多年の経験と苦心して集めた資料を基にして新しい研究がこれから続々と生れることが期待されていただけに，氏の訃報は学界の大きな損失であり愛惜の念に耐えない。(原 寛)